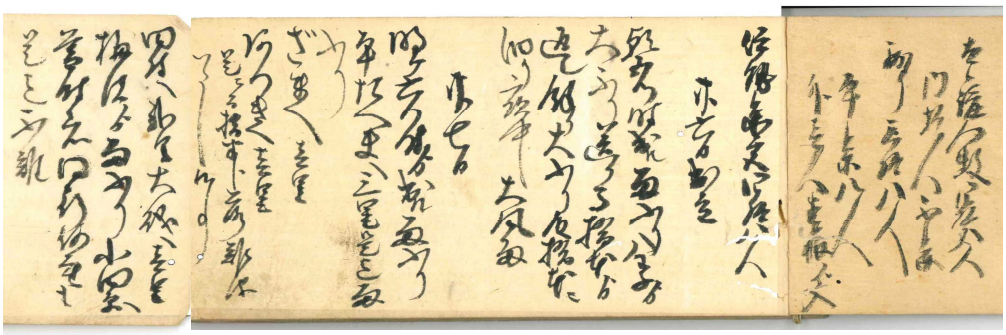
郷土の古文書

その37　伊勢参宮道中日記（一）

編集・発行：五日市郷土館
あきる野市五日市920-1
発行：令和6年1月11日
改訂：令和8年1月8日



解読文

戊　享保十三年　紙数
覚日記
申　正月吉日　有合

（横半帳・表紙）

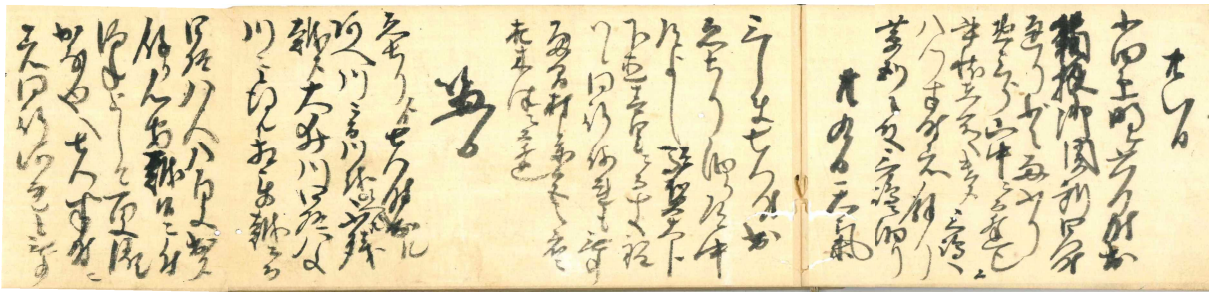
太々講人数四拾八人
内拾人不参
残り三拾八人
平参八人
外壱人青梅ゟ入
伊勢参宮四拾八人

廿六日出立

朝五ツ時出ル　雨ふり
八王子ゟ大ふり　送り馬
橋本ゟ返シ　余り大ふり
故橋本ニ泊り　夜中大風
雨

廿七日

明ケ六ツ時ゟ出ル　雨ふ
り　平たへま（原当麻）へ三里　是迄
雨ふり　ざまへ壱里　あつ
きへ壱里　是ニ而（ここにて）橋半分落
難儀いたし候　事　田村
へ弐里　大磯へ壱里　梅沢
ゟ雨ふり　小田原へ　暮時
着　同行何連も是迄不難



廿八日

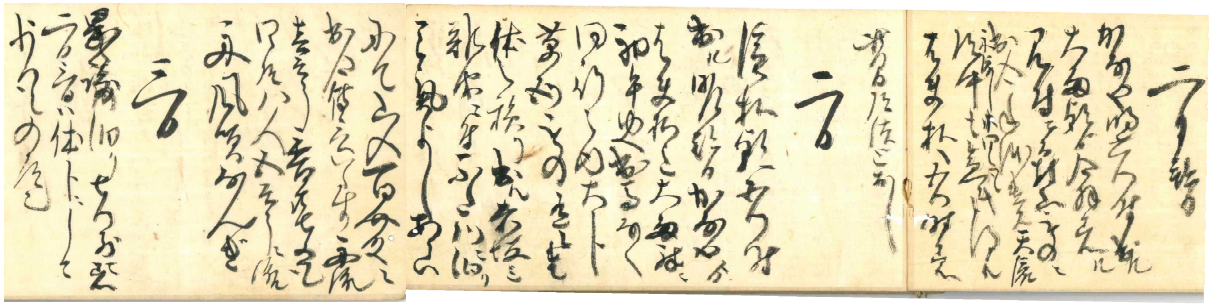
小田原明ケ六ツ時出　箱
根御関所四ツ時　通り
少々雨ふり　惣三郎山中
ニ而逢申候而書状在所へ遣
ス　三嶋へ八ツ半時着
余り（あま）草臥（くたびれ）候　故三嶋（そうろうゆえ）ニ
泊り

廿九日　天気

三しま七ツ時出　ゑちり
泊り　道中道よし　駄賃
大分下直（げじき）壱里ニ而十文程
ツゝ　同行何連も無事
雨間村参宮之者ニ於木津
ニ而逢

晦日

ゑちりゟ七ツ時出ル　阿（安倍）へ
川ニ而川越候へ共不残越ス
大井川四拾八文つゝニ候
得共相乗越（あいのりこし）ニ而　四拾八
人八百文出ス　余り
心安（こころやすくこし）越候ニ付酒手与（と）し
て百文渡シ　かなやへ七ツ
半時ニ着同行何連も無事



二月朔日（ついたち）

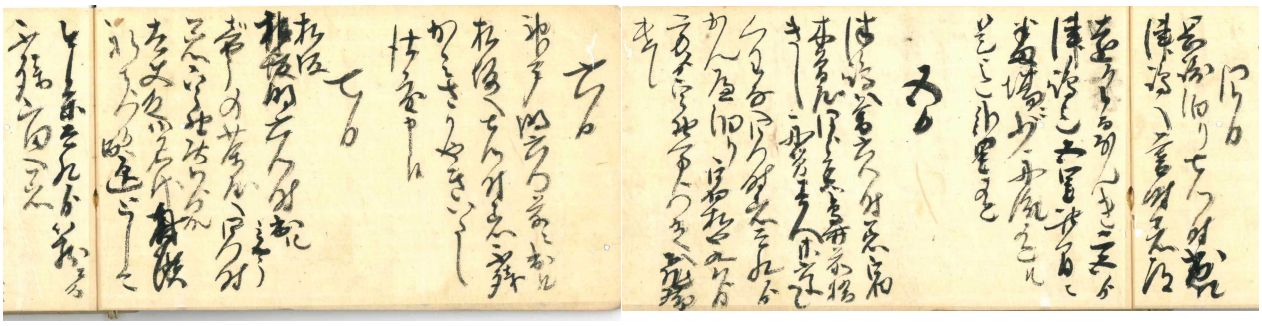
かなや明六ツ時出ル　大
雨朝ゟ合羽着ル　見付ニ而
村山ものニ出合手紙遣ス
天流（竜）舟渡し廿四文ツゝ
道中も急ギ候得共はま松
へ五ツ時着　此間道法（みちのり）と
おし

二日

濱松朝五ツ時出ル　昨朔
日かなやゟはま松迄大雨
殊ニ初午ゆへ出馬なく同
行之内大分草臥（くたびれ）もの有
之候　者休之積り出ル
前坂（舞阪）迄難儀ニ付ふた川ニ泊
り　天気よし　あらいにて
山入（やまいり）百介殿ニ出合伝
言いたす　舟渡シ壱そう
三百廿七文ツゝ四拾八人
五そうニ渡ル　舟風吹なん
ぎ

三日

岡崎泊り　七ツ前ニ着　二
日三日ハ休（やすみわけ）分ニして少
ツゝの道也



四日

岡崎泊り　七ツ時出ル

津嶋へ暮時着　道遠ク候而なんき　宮ゟ津嶋迄五里

此間三番場（万場）ニ少舟渡シ有ル

是迄弐里有

五日

津嶋へ暮六ツ時着　宿木曽屋

四郎兵衛（居）　鳥井前橋きし　舟賃壱人廿六文ツゝくわな へ四ツ時着　それゟかん（神戸）へ泊り　宿

松や九左衛門方ゟ宇野万右衛門殿へ飛脚遣候

六日

神戸（かんべ）明六ツ前ニ出ル　松坂へ七ツ時着　不残

かミさかやきいたし（髪月代）仕度申候

七日

松坂明六ツ時出ル　ミゃう忍やうの茶屋へ四ツ時着　宇野次左衛門様（ごみょうだい）　太夫殿

御名代対談　新左衛門殿

酒迎（さかむかえ）として被参（まいられ）　それゟ籠ニ而

不残山田へ着

全体解説

今回は伊勢参りの道中日記を取り上げました。これは伊奈村（あきる野市伊奈）の名主石川兵左衛門（33歳）の書き残した記録です。

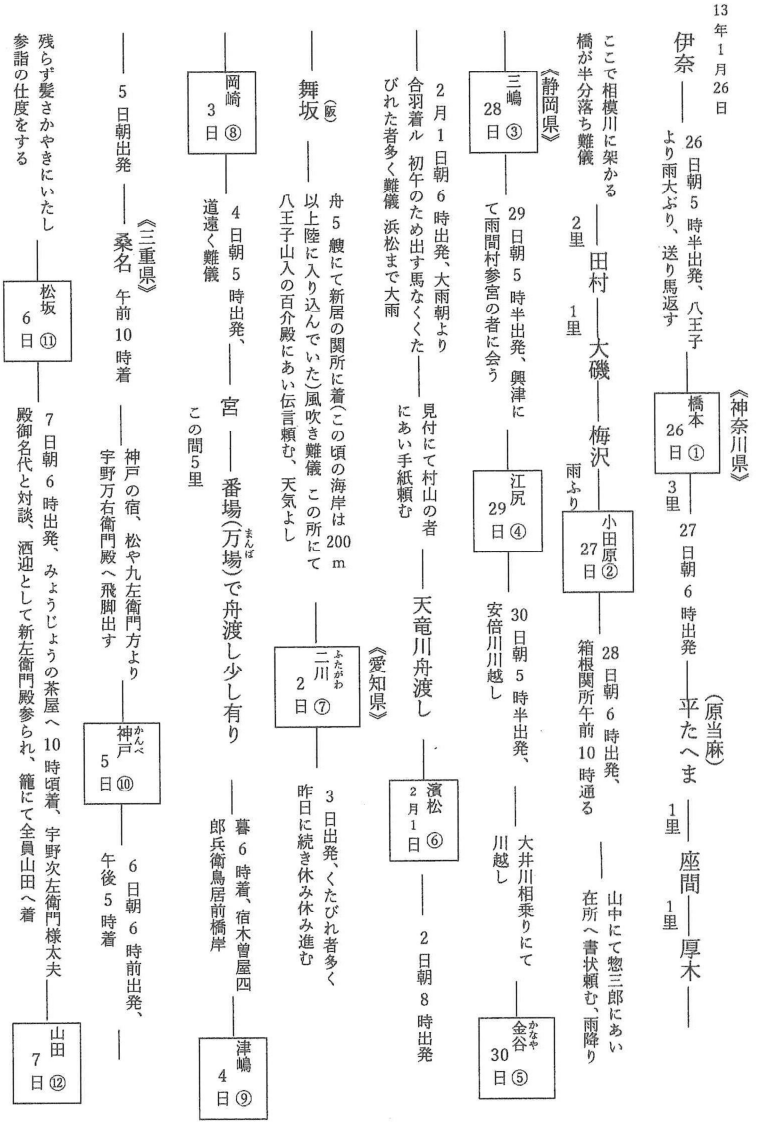
時は享保13年（1728）正月26日出発し、3月15日帰宅する迄の道中の日記です。その内容は宿泊場所、舟渡しや参加者及び御師（おんし）の関係者等への気遣いの様子、また無事帰郷した後に、全費用や今後参宮する人のための心得まで詳細に書かれています。

当時伊奈村の伊勢講（太々講）の仲間は48人でしたが、内10人不参加者がいたので、講に入っていない人からも参加者を募ったようです。結局参加者は、講中の人数と同じ48人で、現代の観光ツアーとしても多人数の方でした。兵左衛門はこの世話役として50日もの間、多方面に気を遣いながら人々を取りまとめています。名主とはいえ、旅が無事終わるまでの苦労は察するにあまりあります。

ところで、伊勢参りは「伊勢詣（いせもうで）」といい、はじめは皇室の祖先神を祀る

伊勢参宮道中日記（一）の道中図解　※□内は泊まった所

［東京都あきる野市伊奈から三重県伊勢市山田まで］



所として、庶民の奉幣を禁じていました。その後、朝廷の財政上の都合等もあり、平安時代末期頃から一般の霊山熊野信仰などと同じく御師の制度を生み、広く国民各層の信仰を集めたのです。当地方の伊勢詣はずっと遅れて、江戸時代になってからと思えます。管見による市内での記録は、この石川家の文書が最も早い方ではないでしょうか。文化・文政期頃になると、信仰のためと称し伊勢詣や西国三十三か所・四国八十八か所巡りなど物見遊山を兼ねた神社仏閣霊場参拝が益々盛況になり、幕府から奢侈禁止令が出される程、一般庶民の賑わいがあったようです。しかし、その記録は少ししか見られません。

この記録を読むと1日30㎞から50㎞、雨の中でも歩き通すという強行軍です。当時の人達の強靭な体力と精神力には全く驚嘆させられます。

尚、紙面の都合上連続4回に分けて発行します。1回目は伊奈の宿を出発して伊勢山田へ着いたところまでです。

道中解説

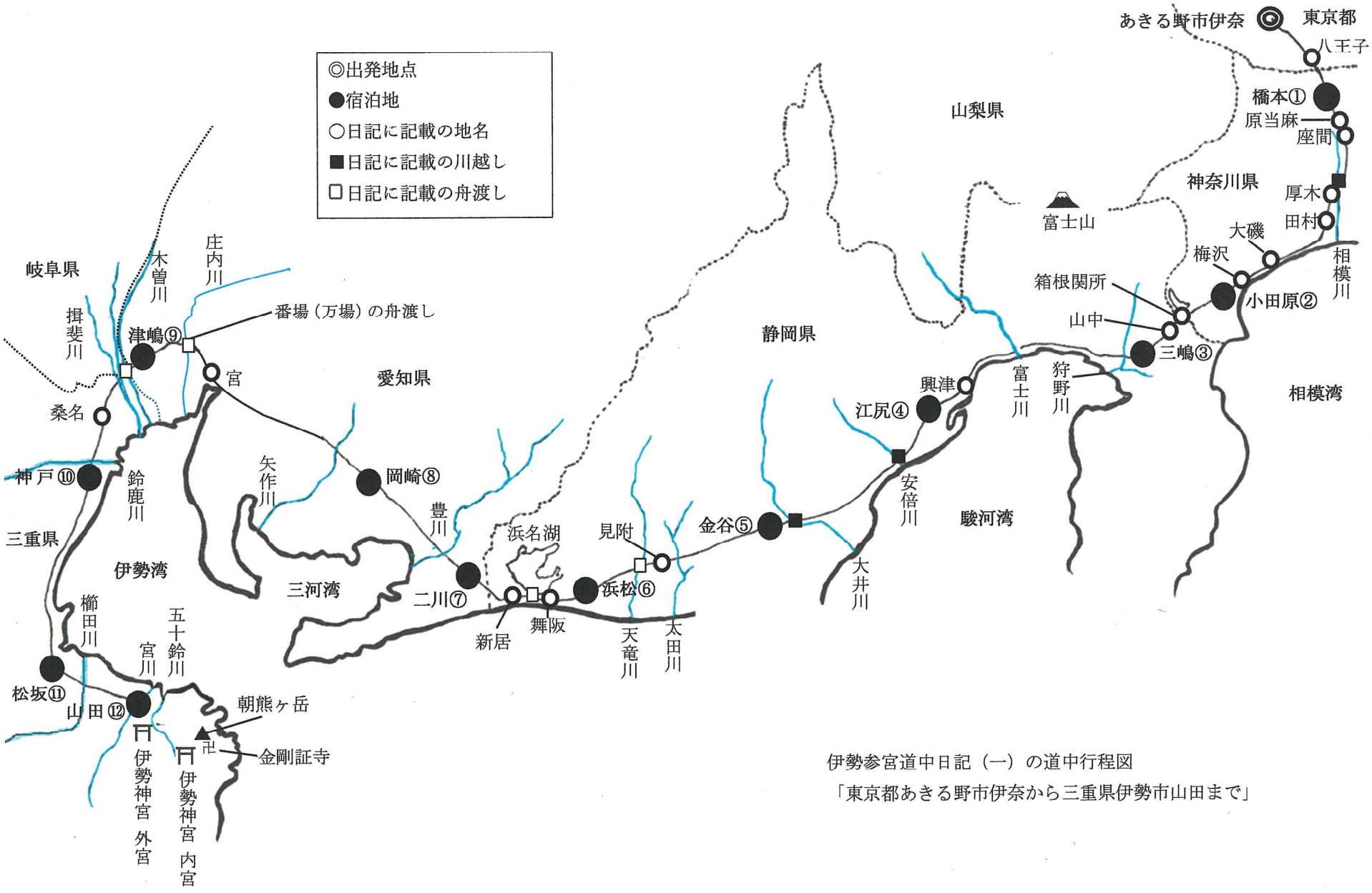
伊奈を正月26日朝5時半に伊勢へむけて出発した一行48人は、八王子で雨が大ぶりになり、神奈川県の橋本で送り馬を返して泊まることにしました。夜中大風雨で、翌27日朝6時に雨の中出発原当麻・座間と進み、厚木で相模川に架かる橋が半分落ちていたため大変だったようです。それから田村を通り大磯で東海道に出て小田原へ暮時に皆無事着き泊まりました。

28日小田原を朝6時出発、箱根の関所も10時に無事通り、山中で知り会いの惣三郎に逢ったので、伊奈へ手紙を頼んでいます。小雨の中歩きどうしでくたびれた一行は午後3時頃三島へ着いて泊まりました。29日三島を4時出発江尻に泊まりました。この道は良かったため「駄賃大分下直」とあることから、宿場毎に荷物を運ぶ馬や人足の費用がかかりここでは他の宿場と比べて安かったようです。興津で今度は雨間村参宮の人に逢っています。30日江尻を朝4時出発、安倍川を全員越し、大井川を相乗越しで越しました。心配していたより人足達にも恵まれ、皆無事に越せたので感謝の気持ちをこめて酒手として100文渡しています。金谷へ5時半頃着き泊まりました。

2月1日金谷を朝6時大雨なので合羽を着て出かけ、見付で村山の人に逢って手紙を頼んでいます。この日は初午のため出る馬もなく、その上道中も長く同行の内に大分疲れた人も多く、濱松へ夜8時頃着き泊まりました。2日濱松を朝8時出発舞阪迄昨日の疲れもあって大変だったようです。舞阪から新居迄海上1里を5艘の舟で分乗して渡りました。この海岸は江戸時代200m以上内陸に入っていました。舟風が吹き大変な思いをして着いた所が新居の関所です。ここで山入の百介殿と出会い伝言を頼んでいます。それにしても遠方に来て偶然にも知り合いに逢うことに、兵左衛門の顔の広さもさることながら驚きます。この日はあまりにも疲れたので二川に泊まっています。3日朝二川を出発岡崎へ午後4時前に着き泊まります。2日と3日は皆くたびれていたので休み休み歩いてきました。4日岡崎を朝4時出発津島へ暮時には着き泊まります。万場の渡しで少し舟に乗りますが、40㎞以上歩き通したようです。宿鳥居前橋ぎし木曽屋四郎兵衛は津島神社の門前だと思います。津島神社は旧称津島牛頭天王社と呼ばれその祭礼は船祭としてあまりにも有名です。江戸後期の五日市の商人の日記にも出雲大社と同様に津島神社札配が来たことが記されています。一行も当然参拝したと思います。

5日朝津島を出発、津島街道を南下して佐屋湊へ着きそこから桑名迄海を舟で渡ったようです。当時は佐屋宿の近くまで海岸が入り込んでいました。そのため、三里の海上を舟で進み、桑名へ10時頃着き、それより神戸へ行き泊まります。宿松屋九左衛門方より御師宅へ飛脚を出し、無事着いたことを知らせたと思われます。

6日神戸を朝6時前出て松坂へ午後4時に着きそれから全員髪を月代にして参宮の仕度をしたようです。7日松坂を朝6時に出て明星の茶屋へ10時に着き太夫名代宇野次左衛門様と対談、酒迎として来た新左衛門殿の案内で全員籠に乗り伊勢山田へ着いて泊まりました。



伊勢参宮道中日記（一）の道中行程図

「東京都あきる野市伊奈から三重県伊勢市山田まで」